

3 φ ω X · Λ E

EV.Café

超進化論

村上龍 + 坂本龍一



講談



+ ρ ψ υ ι χ η

イーヴィー・カフェ
EV. Café 超進化論

むらかみ りゅう さかもと りゅういち
村上 龍 | 坂本 龍一

© Ryu Murakami | Ryuichi Sakamoto 1989

1989年1月15日第1刷発行

1990年2月5日第6刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-184359-1



講談社文庫

EV. Café

超進化論

村上 龍 | 坂本龍一

講談社

目次

E
V
·
C
a
f
é

超
進
化
論

Stage 1

音楽と言葉の差異

聖域としての音楽

中島みゆきの音楽

女性が子を産む強さ

中上健次の困難さ

言葉の自壊作用

ポップの波

父権社会の崩壊

母性の喪失

人間には内部はあるのか

言語の内部と外部

テクノロジカルな操作が表現

物語の解体の果て

表現

吉本隆明

Stage 0

時代という現場

日本的な音楽の土壌への拒否

音楽の快感原則

吉本隆明への危惧

戦争回避による欲望のはけ口

コンピュータ・グラフィックス的操作の時代

快感

Stage 3

『構造と力』が興奮させるもの

経済の破綻をまねくカリスマ

国際通貨のギャンブル性

経済ネットワークのリアリティー

アメリカ文化の面白さ

異種交配から生まれるもの

この時代に戦略が立てられるか？

アメリカと日本の差異

テクノロジーと差異体系

高橋悠治とグレン・グールド

メタリック音のもたらすもの

高エネルギー振動から溶解へ

日本的平準さを破るもの

金属

浅田彰

Stage 2

サルから見た人間の実像

なぜ人は二本足で立ったか

性と攻撃性

三百五十万年のうちの一万年

狩猟民の時間

分子レベルでの思考

「考える脚」

生物

河合雅雄

Stagger 5

映画と日本人の顔

進化と凡庸

一流志向の脆弱さ

逡巡と排除

コッポラの混乱

ゴダールとマキノ

言葉における「制度」

匿名の声として響くもの

映画の顔と音楽の声

多様性のなかの人生

凡庸

蓮實重彦

Stagger 4

日本的ポストモダンの中で

コカ・コーラは思想だ

消費社会での情報と差異

神秘主義へ導くもの

意識はどこにあるか？

神秘主義と無根拠性

民主主義とチューインガム

批評の権力意識

内面のない苦しみ

マシーンとしての自己

アメリカ的とヨーロッパ的

アメリカの底力

日本的普遍という制度

外部の獲得

パラドックスとしての独創性

外部

柄谷行人

文庫版あとがき

361

村上龍

坂本龍一

395

註

エレクトロニクス・ゲリラによる情報の攪乱

「ブレードランナー」における神の復活

ハイパー・ムービーの出現

テクノロジーと超プラトニズム

三百五十万年の記憶

核時代の新人類の予感

テクノロジーと一神教

物語の不健康さ

テクノロジーの回避としてのアジア主義

超情報社会の新日本主義

ソフトなシステムとしての天皇制

日本は大規模集積回路

近未来のユダヤ教と天皇教

Stagger X

序走

今は往年の名スター

小錦スキゾ力士論

周縁理論と落書マンガ

ヒューマニズムは陰謀だ

ブラジルは世界最後の救い

欲望全肯定の暴力

カーニヴァルの都市

スピードとリズムのファシズム

Stagger 6

速度

山口昌男

321

289

写真リスト

- P.32-33 Défilé militaire, Egypte by René Burri / PPS
P.116-117 Peter H. Beand / PPS
P.195 Plane Carrier / オリオン
P.206-207 Herman J. Kokojan / PPS
P.279 Vivian and Joël by Ed. van der Elsen / オリオン
P.336-337 Bernard Herman-Gamma / Imperial Press

企画・編集 株式会社本本堂
本書は一九八五年十一月に本社より単行本として刊行されました。

EV. Café

超進化論

村上龍＋坂本龍一

ゲスト

吉本隆明

河合雅雄

浅田彰

柄谷行人

蓮實重彦

山口昌男

Stage 0

快 感

18 November 1983

時代という現場

坂本「来年どうしますか」と聞かれて、「来年からは自分のペースで仕事をしたい」と言うんだけど。今までは自分のペースであまり仕事をしてない……そういうニュアンス、分かるでしょう。そのときによく使う比喻で、小説家が小説を書くようにとか、画家がうちで絵を描くように、音楽をつくりたいというふうに言うのね。実際、小説家としてどうですか。

村上俺が小説家だから、小説を書いたときに自由だなと思うのかもしれないけど、窮屈な感じしないね。例えば、映画なんか撮って、共同作業そのものは別に何ということはないんだけど、その後のプロモーションとか、音楽家がやってるスタジオに行って聴いたり、打合わせをしたり、金を出してくれた人と会ったり、そういうことはすごく煩わしくて窮屈な感じがするよ、何か制約を与えられているような気がしてき。制約が好きな人間もいるだろうけどね、たぶんコピーライターなんかそうだと思うけどさ。

坂本もう一つ、現場に対する時間の遅れ方ってあるじゃない？ 例えばカメラマンは現場にいる——リアルタイムでさ。小説家は現場に五年後に行くっていう話を前にしてたよね。

村上うんうん。

坂本時代という現場と自分と、それから自分が生む作品。この三つの関係の取り方で、小説家や画家は現場に行かなくてもいいわけだからさ。僕たちのような日本の音楽家というのはさ、カメラマン的なわけじゃない。いつも自分で顔を出しててさ。

村上ライブ・パフォーマンスやる音楽家っていうのはカメラマン以上だよな。

坂本時代そのものだからね。兵士なわけよ。僕は、昔、自分は音楽という戦場の兵士だとい

うような比喻を使つてただけども、もうそろそろ飽きてきた（笑）。自分のうちで、三カ月ぐらいかかつて一曲書くとか、そういうことのほうが未来に手が届くつていう気がする。そういう仕事の手感というのか、時代の時間の流れと自分の時間の流れ方の離れ具合、バランスの取り具合をしていたいなあと、この一年ぐらいで微妙に変わつてきたよ。

村上俺も小説書いているときに一番お金にもなるし、パワーをつけていく有効な手段だと最近気づいたんだよね。昔は、例えば、一時間ぐらいの講演でお金もらえと、いい仕事だなあと思つて、これに比べると小説書くつて率が悪いなあと思つただけど、計算してみると、講演よりやっぱいいんだよね。

坂本計算してみたの？

村上計算してみた（笑）。小説というのは、自分が何に興味を持っているかはつきりするし、その興味の対象の人間とも会えるし、本も読めるしね。小説を書く自分の今のペースはすごくいいなあと思つてる。

坂本自由な時間というのかな、空白の時間も含めて、そういう時間がこれからとっても必要だという気がするのね。そうすると商品をたくさん生産できないから、どうしたらいいかつていうと、単価を高くするしかないわけ、僕なんかの場合は（笑）。自分の時間を確保することをやつていかなないと駄目なんだよね。

村上¹ブライアン・ジョーンズの伝記を読んで、すぐ坂本のことを考えたんだけど、ブライアン・ジョーンズは、すごく悲しいやつで、みんなから仲間外れにされてき。たぶん、ミックもキースも彼のことを好きで、一緒にやろうよと言つてたと思うんだけど、でも、やっぱ

ブライアン・ジョーンズは演奏家だったわけじゃない？

坂本そうだね。

村上あの頃、シンセサイザーがもっと発達してれば、ブライアン・ジョーンズは死ななくてもすんだんじゃないかと思ったの。あいつは、モロッコ行ったり、何百という楽器、シター²ルなんかを弾いたりしたよね。結局、自分一人でオーケストラをやったんじゃないかと思うんだ。だから、シンセサイザーがなかったら、坂本なんか、相当しんどいんじゃないかと思うんだ。

坂本それは言える。これもよく言ってた比喻なんだけども、尺八の音を使いたいと思うじゃない。自分が使いたい尺八の音を出すためには、十年とかかるわけ。待っていられないよ。その音をシンセサイザーでやれば、十分ぐらいでできる。しかもいいことには、尺八だと、日本の尺八の音だと分かつちゃうわけだけど、シンセサイザーだったら、あいまいですむわけよ。日本的でもあるし、しかし無国籍だし。時代のどこに置かなくちゃいけないということもないし、すごく自由なんだよね。だから、シンセサイザーとつき合ってきたというのは、やはり、とても大きい意味があったと思うよ。

村上そうだよ。

坂本僕はポップスのアレンジャーもやったし、スタジオでピアノも弾いたし、それからフリー・ジャズなんかを阿部⁴薫たちとやったりとか、いろんなことやってきた。自分が一番テンションが高くなったのは阿部⁴薫と一緒にやったときだったけど。

村上それ、いつ頃なの？

坂本一九七五、六年じゃないかな。僕がスタジオ・ミュージシャンとして一番忙しい頃に、夜寝ないで阿部薫とセッションしたりしてたんだ。阿部薫は、その二、三年後に死んだんだけど、そのままいってたら、僕も一緒に死んでたかもしれない。

村上俺も阿部薫、聴いたことあるよ、七〇年頃。俺、そのころアルト・サックスやってたんだけど、あれ聴いてやめたよ。この人は何かやっぱ死ぬんじゃないかって予感したね、聴いていて。

坂本死ぬと儀式が完結するから、一番いいことなんだけどね。

村上でも、死ななかったやつっていうのは体力があつたんじゃない？

坂本そうだね。下世話な体力もあるしさ。

村上たぶん、体力だと思うんだ。阿部薫が死んで坂本が生き残っているっていうのは。

坂本そうかもしれない。阿部薫は実際にドラッグで体力もなくなってたしね。

村上時代の流れていふといやな言葉だけど、そういうのがあつたような気がするね。肉体が信じられていふような音楽がずっと主流を占めてたでしょう、⁵コルトレーンとか。

坂本ちようど変わり目だものね、阿部薫が死んだの。阿部薫が死んでジャズが終焉した。

村上ジャズが日本でまだすごく人気があるでしょう。死んでいないんだよ。ニューヨークなんか行ったらはつきりしているじゃない、もうどうしようもないものね。ロックがジャズの息の根を止めたんだよ。でも、日本ではジャズの息の根が止まっていけないんだよね、そう思わない？

坂本あまり興味ないから分かんない。